

第17章

小佐々の歴史と文化財



小佐々の位置

この地域の小中学校

小学校: 小佐々小学校、楠栖小学校

中学校: 小佐々中学校

こ さ ざ れ き し ぶ ん か ざ い
第17章 小佐々の歴史と文化財

ほんどさいせいたんまち
本土最西端の町

小佐々町は、佐世保市の北西部に位置する日本本土では最も西にある町です。北は標高303メートルの冷水岳を最高所として、南と西側へ向かう山裾が海に迫り、海岸は入り組んだ入り江が続いています。そして、南に広がる海は、西海国立公園九十九島のなかでも、北九十九島の島々が散らばり美しい風景をつくりだしています。

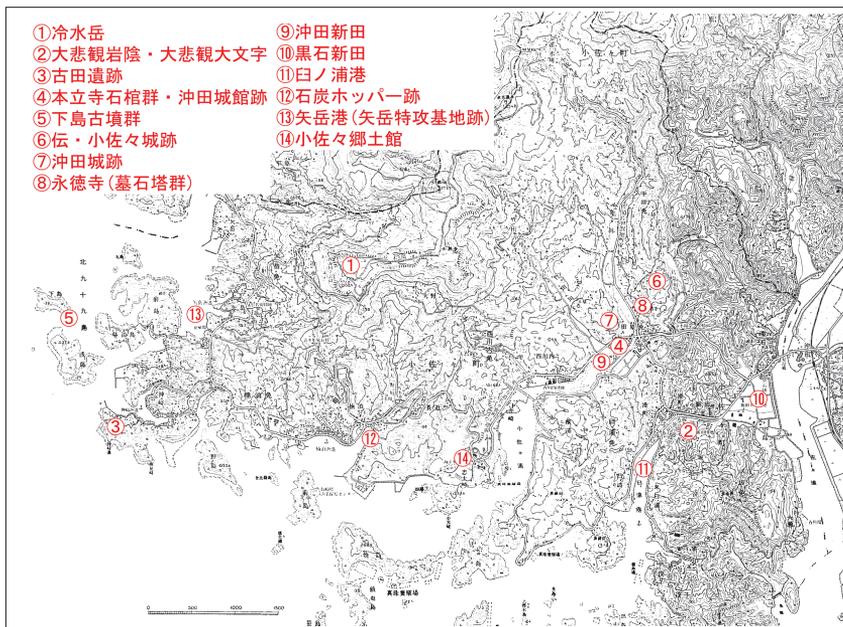


本土最西端の岬、神崎鼻



それらの島々や、入り江では魚やカキ・真珠の養殖が行われています。また、天然の良港に恵まれていて漁港も多く、イロコ生産など水産業が盛んな土地柄となっています。

←冷水岳から見た北九十九島



小佐々の地図

大悲観岩陰遺跡

小坂にある大悲観公園の一角に大悲観岩陰と
呼ばれる洞穴遺跡があります。間口が8メートル、
奥行きは3メートルの大きさがあり、縄文時代の
1家族が住めるほどの広さがあります。

縄文時代の早期(約8,000年前)から古墳時代
(約1,500年前)にかけての土器や石器が出土して
います。



大悲観岩陰(市指定史跡)

縄文時代の遺物は、狩りの道具である矢じりや、獲物を解体するための石匙、ドングリなどを
すりつぶす石皿とたたき石、木の伐採や加工のための石斧などがあります。このことから、縄文
時代のある時期は定住していたようですが、岩陰の主な使われ方は狩猟に出かけたときのキャン
プ地だったと考えられます。



大悲観岩陰出土品
小佐々郷土館所蔵

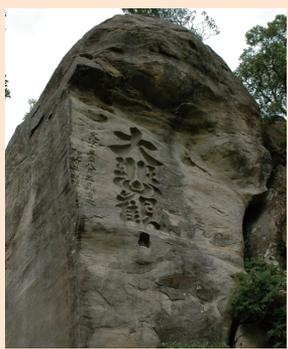
岩陰がある場所は、浅子半島の付け根にあたりま
す。ここは、佐々浦と小佐々町田原の低地を隔てる
山が唯一狭い谷間になって途切れている場所で、江
戸時代には佐々浦からの道が通っていました。

この谷は、原始時代から多くの人を通る道筋だっ
たと考えられます。そして、すぐ近くにある大悲観岩陰
は、この谷を通る人たちにとって格好のキャンプ地とな
っていたのです。そのため、幾つもの時代の遺物が残
されたと考えられます。

コラム～大悲観～

高さ20メートルの塔のような砂岩に、長さ4メートルの巨大
な「大悲観」の文字が刻まれており、平戸八景の一つに数
えられている。この「大悲観」大文字は、江戸時代終わり頃
の平戸藩主だった松浦熙(観中)公が自ら筆をとって文字を
書き、それを拡大して岩に彫り込んだものである。

大悲観とは大悲観世音菩薩を意味するもので、文字の下
に小さな穴が彫り込まれ、そこに菩薩の木像が安置されてい
る。



大悲観(国指定名勝)

- 1 平戸在連遠いの8ヵ所の名勝・奇勝(優れた景色、普通ではない変
わった景色)。佐世保の「眼鏡岩」、「蔵屋宮」、「羅漢窟」、「潮の
目」、江迎の「潜龍の瀧」、「高岩」、吉井の「御橋観音」の天然石
橋、小佐々の「大悲観」の総称。

最西端の遺跡・古田遺跡

古田遺跡は、日本最西端の地である神埼にあり、縄文時代中期(約4,000年前)から古墳時代(約1,500年前)にかけての遺跡です。

遺跡の全貌はまだ分かっていませんが、古墳時代の須恵器(陶器の一種。窯で焼かれるため灰色で硬い。)や、土師器(土器の一種。素焼きであるため赤く、もろい。)の出土量が圧倒的に多いことが分かっています。

また朝鮮半島で作られた土器も出土していることから、大陸文化の影響も受けていることが分かります。



古田遺跡の埋葬人骨

※写真提供：長崎県教育庁学芸文化課

古田遺跡で暮らした人々は、海で魚や海草を採る海民であったか、または九十九島の海を舞台とした海上交通を生業にしていたのかもしれませんが。

本立寺石棺墓群

田原の本立寺のある場所は、戦国時代に沖田城の館があったと考えられています。この境内から3基の箱式石棺墓が発見されています。2基は地表に露出して発見され、1基は館の防御のために造成した崖に、その断面が見えていましたが、今は場所が分からなくなりました。

箱式石棺は、砂岩の板石を箱の形に組み合わせて、人を葬る棺としたものです。約2,000年前頃の弥生時代のもと考えられています。その後の古墳時代のもかもしれません。



古田遺跡

遺跡からは、古墳時代の埋葬人骨も発見されています。成人男性が体を伸ばした形で葬られていました。この時代は、首長クラスの人古墳(土を盛り上げた高塚)、首長より下位の人は石棺に埋葬されることが一般的です。古田遺跡に埋葬された人は、砂丘に直接穴を掘っただけですから、さらに身分の低い人かもしれません。

遺跡は海岸に近い砂丘にあります。そのため、水田はもちろんのこと畑作にも適していません。



本立寺石棺群(市指定史跡)

※写真は移設復元されたもの



田原地区に広がる水田

今まで発見された3基のほか、寺の前付近からも石棺が出たと伝えられていますので、まだ発見されていない石棺があるかもしれません。

田原地区には、小佐々川が造った沖積地があり、水田に利用されています。戦国時代には小佐々氏の本拠地でもあったように、弥生時代や古墳時代から田畑を耕す文化があり、小さいながらもムラがあったと考えられます。

コラム～下島古墳群～

九十九島の一つ、下島にはハカマカズラという植物が自生していて、長崎県の天然記念物に指定されているが、この下島には古墳群もある。

島の東側に延びた岬状の平坦な場所に約50基の積石塚状の遺構が認められる。遺物等が発見されていないので、時代などは未だ分かっていない。本格的な調査が待たれる遺跡である。



下島遠望

小佐々氏が現れる

約1,500年前の古墳時代までは遺跡があつて、人の歴史が残っていますが、それ以降の奈良時代や平安時代になると、遺跡が見つからないため、どこに、どのような人たちが暮らしていたのかは分かっていません。

鎌倉時代前期の1218年(建保6)に、宗家松浦氏から分かれた武士の峯氏の領地として屋武(矢岳)や楠泊の地名が現れます。そして1244年(寛元2)に肥前国²御家人小佐々太郎重高と初めて「小佐々」を名乗る人物が出てきます。

小佐々は、もともとは伊万里(佐賀県伊万里市)を本拠地としている峯氏の領地でしたが、峯上の代で長男の小佐々太郎重高に小佐々を譲っています。つまり、小佐々太郎重高こそ最初に小佐々の領主として住んだ人物と考えられるのです。



伝・小佐々城跡遠望

2 幕府の家来のこと。全国の土地をもつ武士たちは、その領地を保証してもら(これを御恩という)代わりに、幕府の家来になった(これを奉公という)。

コラム～地名を姓とする意味～

松浦党に限らず、鎌倉時代頃の武士たちは、その住んでいる土地の地名を姓としている。それはなぜか？

一つは地名が先に知られていて、地名を名乗ればその武士が住んでいる場所が明らかに分かり、その地を代表するという意味があること。

もう一つは、領地支配で農民などを統制するため、その土地の名主という政治的な意味も含まれているらしい。

1384年(永徳4)の松浦党の「一揆契諾」に運なる武士の名をあげると、ひらと(平戸)、たひら(田平)、やましろ(伊万里市山代)、あいのうら(相浦)、ささ(佐々)、こささ(小佐々)、ひう(日宇)など、地名を名乗る武士が大部分を占める。

なお、地名などを姓名の代わりにする習慣は江戸時代にも残っている。普通の農民や町人は名字(姓)を名乗ることは許されていなかったで、農民は地名、商人は屋号を姓の代わりにしていることが多い。平戸に多い「油屋」や「万屋」などの姓は、明治時代になって戸籍を作るときに、江戸時代の屋号を姓にした例である。

3 平安時代の終わり頃から北松浦地方一帯にいた武士団の総称。

4 互いに同盟関係を結ぶための文書のこと。

沖田城と小佐々氏

小佐々町田原の本立寺がある丘と、その背後の城山は小佐々氏の居城、沖田城の跡と考えられています。裏手の城山に山城を築き、その麓の丘陵を造成して館を構えていたようです。城の東は小佐々川の浅瀬、南と西は小佐々浦になって、三方を天然の堀で囲まれた地形となっていますが、館のあった場所は、本立寺を建てるときに削られていて、すでに古い地形は失われています。



沖田城跡遠望

沖田城は、館(根小屋)と山城がセットになった、戦国時代の城の典型的な姿と考えられます。平穏なときの領主は館に住み、戦いとなり攻められたときに山城に立て籠るのです。



永徳寺(市指定文化財)

沖田城跡の北東約500mの所には、小佐々氏の菩提寺である永徳寺があります。1431年(永享3)に小佐々小治良(小次郎)が寺に山林や田、半鐘を寄進したことが、永徳寺の半鐘に刻まれています。つまり、小佐々氏が寺を建立し、寺の収入源となる山林や田を寄進し、さらに半鐘を納めたのです。永徳寺は小佐々氏の私寺であったようですが、それは領主が住まいとする沖田城の鬼門(北東方向)を護る役割があったと考えられます。

コラム～城と鬼門～

江戸幕府を開いた徳川家康は、顧問の僧天海の意見により、江戸城の北東方向にある上野の地に寛永寺を建立した。北東の方角は、陰陽道では「鬼門」と呼び、鬼が出入りする方向として何事をするにしても忌み嫌われた方角である。

城を築き、城下町を建設する際に鬼門を意識したことは、江戸城では明らかであるが、地方ではあまり研究が進んでいない。しかし最近では佐世保市でも、武辺城には新豊寺、大智庵城には瀬戸越観音堂など、城と鬼門の関係を示す例が増えている。

武将の生死、存続にかかるとともに、鬼門にも注意が払われた可能性は高い。



沖田城と永徳寺の位置関係

コラム～寺は誰のもの？～

日本に仏教が伝わったのは西暦552年(一説に538年)頃といわれている。そして寺が建てられるが、初期の寺は国が造り運営した。西暦593年に大阪の難波四天王寺が創建され、西暦607年には聖徳太子が法隆寺を建てている。741年(天平13)には、全国に国分寺を建てるよう国は命令を発した。その頃には、国に習って貴族や豪族も私寺を建てるようになる。

鎌倉時代や室町時代になると地方でも武士や土地の名主も寺をもつようになる。そうした小佐々氏の私寺であった。しかし、寺の運営は寺独自で行うことが建前であるため、寺を建てた領主が田や山林を寄進した。従って、田から採れる米などの農作物が寺の収入になった。

戦国時代になると、土地の領主が減んだり、本拠地が替わったりしたことから、寺としての経営が立ちゆかなくなった。そのため江戸時代になると農民や町人など一般民衆を取り込んだ檀家制度に変わった。これが今日の一般的な寺の姿である。

もう一人の小佐々氏

小佐々氏の系図によると、室町時代、現在の滋賀県にいた近江源氏を祖先とする佐々木氏が、1413年(応永20)に小佐々に移住して、小佐々氏を名乗っています。そして、約50年後には、この小佐々氏は西彼杵半島の大瀬戸に移りました。

松浦党の峯氏に始まる前小佐々氏、近江から来た後小佐々氏と二家並んであったものか、前小佐々氏が、後小佐々氏に併合されたものかよく分かっていません。

平戸松浦氏の北松浦統一と小佐々氏

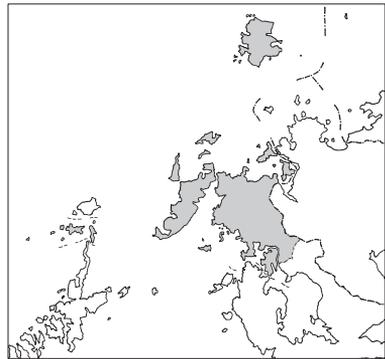
宗家松浦氏から分家した平戸松浦氏は、15世紀になると北松浦地方の制圧に乗り出します。1476年(文明8)には、佐々を本拠地にしていた佐々氏を併合し、次いで、1495年(明応4)には、志佐氏がいた吉井を支配下に浴めます。

その後、1563年(永禄6)に2度に亘る攻撃の末に、相浦を本拠地にしていた宗家松浦氏も家臣とすることに成功しています。(第4章相浦谷参照)

小佐々氏が出、大瀬戸に移った時期は飯盛城攻撃の前頃です。移った理由は詳しく分かっていませんが、恐らく平戸松浦氏による半島制圧のなかで、平戸松浦氏の家臣になることを避けて移動したのではないのでしょうか。

小佐々氏は小佐々のほか西彼杵半島にも領地を持っていたため、移ることができたのでしょう。しかし、移る土地を持たない佐々、志佐、宗家松浦各氏は、平戸松浦氏の家来にならざるを得なかったと考えられます。

さらに平戸松浦氏は、1586年(天正14)までには、針尾島の針尾氏を追い出し(第12章針尾島参照)、壱岐から長崎県北の全て、そして大村領と国境を接する三川内から早岐、針尾の領地化を進め、江戸時代の平戸藩の範囲を固めることに成功しました。



戦国時代末期の平戸松浦氏の勢力

コラム～その後の小佐々氏もいる～

小佐々氏が大瀬戸に移った後、平戸松浦氏の松浦弘定が1498年(明応7)に宗家松浦氏の大智庵城を攻めたときや、1563年(永禄6)の松浦隆信による飯盛城攻撃、1574年(天正2)に松浦鎮信が大村純忠の居城三城城を攻めたときの家臣のなかに小佐々氏の名前が見える。このことは、大瀬戸に移った小佐々一族の一部が残ったか、あるいは後から小佐々に入った武士が小佐々氏を名乗ったことが考えられる。

小佐々氏のその後

小佐々氏は大瀬戸に移った後、大村氏の家臣となり、一族は西彼杵半島の外海側の多比良、中浦、そして五島灘の松島にそれぞれ城を構えたといわれています。

1569年(永禄12)に大村純忠が、宮村の大村純頼を攻めたとき、大村方の武將として小佐々弾正と小佐々甚五郎が参戦しています。(第13章宮参照)



小佐々弾正、甚五郎の墓

※墓石は江戸時代のもの

この戦いで、平戸方の援軍により大村方は敗れ、弾正と甚五郎は戦死してしまいました。新参の家来であるため、主君に忠誠心を示すためにも、二人は命をかけて戦ったのでしょう。

また、1582年(天正10)に大村純忠は、島原の有馬晴信や豊後の大友宗麟らとともに、ヨーロッパに少年4人を中心とした使節を派遣していますが(天正遣欧少年使節)、この少年使節のうち、中浦ジュリアンは小佐々氏の出身でした。



中浦ジュリアン銅像
※撮影:西海市 中浦ジュリアン記念公園

永徳寺の墓石塔群

永徳寺の境内には、五輪塔や宝篋印塔などの墓石がたくさん残されています。その多くが西彼半島で採れる緑泥片岩という石で作られたもので、総数は140基ほどになります。



永徳寺墓石塔群
(市指定文化財)

これらの墓石は、もともと永徳寺にあったものと、寺の周辺から集められたものがあり、14世紀中頃から15世紀前半までに作られた古いグループと、16世紀後半から17世紀前半までに作られた新しいグループに分けることができます。



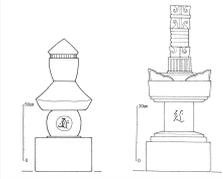
一条沈線五輪塔

このうち、古いグループに入る墓石は20基くらいしかありませんが、いずれも丁寧な作りで造形的にも優れているという特徴があります。なかでも特に珍しいものが、「一条沈線五輪塔」と呼ばれる墓石です。これは笠の部分(火輪)の軒下に1条の溝を彫り込んだもので、小佐々氏の出身地である伊方里地方に例があります。この墓石は、1799年(寛政11)に平戸藩が行った、神社仏閣などの調査報告書『田舎廻』に記されている「小佐々殿の墓」と考えられており、現在小佐々郷土館に展示されています。

また、古いグループの墓石の中には、永徳寺の住職の墓と考えられる立派な僧侶の墓が2基(1基は小佐々郷土館に展示中)あります。このことから、古いグループの墓石は永徳寺の住職や、小佐々氏一族の墓と見てよいでしょう。

- 1 供養塔や墓碑として建てられたもので、上から宝珠、半月、笠(屋根)、円形、方形の石を置き、それぞれ空、風、火、水、地の仏教で宇宙の構成要素とする五大を表している。
- 2 もともと、宝篋印陀羅尼經という經典を納めるために建てられたもので、後に供養塔や墓碑として建てられた。

五輪塔(左)と宝篋印塔(右)→



そして、15世紀の中頃から16世紀の前半の約100年間に作られた墓石がありません。これは、小佐々氏が西彼杵半島に本拠地を移し、墓を造ることができる領主や僧侶がいなくなったことに深く関係していると考えられます。

新しいグループの墓石群は数が多く、また作りも粗雑になります。これは、墓石の主が低い地位の人だったことを物語っています。後半の墓が造られた時期は、小佐々地方が平戸松浦氏の支配下に入り、小佐々氏という有力な領主がいなくなったことに関係していると考えられます。



新しいグループの墓石

江戸時代の小佐々

戦国時代の終わりに、平戸松浦氏の領地となった小佐々地方は、そのまま平戸藩の一部として江戸時代を迎えました。

江戸時代の小佐々は、小佐々村と矢岳村からなっていて、年貢の取り立て、治安の取り締まりは、佐々、市ノ瀬、小佐々の3か村をまとめる佐々里代官所が行っていました。

海を埋めて土地を開く

江戸時代初頭の1604年（慶長9）に、平戸藩が幕府に提出した領内の検地石高によると、小佐々の水田は22町（約22万平方メートル）で、取れる米は311石（約47トン）と大変少ないものでした。隣の佐々村と比較すると7分の1以下だったのです。

江戸時代、全国各藩の財政は米の生産が支えていました。そのため、江戸時代を通して各地で盛んに開拓が行われました。海に面した小佐々地方では、海を埋め立てて水田に変える「干拓」が盛んに行われました。干拓によって開かれた土地は「新田」といい、佐世保市内にも多くの新田が造られました。特に有名なのが、相浦川河口に造られた大瀧新田です。（第4章相浦谷参照）



沖田新田

小佐々では、1698年（元禄11）に平戸の谷村貞之によって、佐々川河口に大別当新田が造られたことを皮切りに、丸山、黒石、沖田、常平倉、八幡崎など、明治時代の初め頃まで新田開発は続きました。

小佐々と炭鉱

かつて、小佐々を含めた北松浦地方は、たくさんの炭鉱があり「北松炭田」と呼ばれていました。本格的に石炭が掘り出されるようになるのは、明治時代に入ってからですが、一部の炭鉱は江戸時代にはすでに採掘が始まっていた。

小佐々では、江戸時代後期の文政年間(1818～1829年)に相浦の齊藤松五郎によって、大瀬炭鉱が最初に開かれ、瀬戸内海沿岸での製塩用に運び出されています。

その後、小佐々では次々と炭鉱が開かれ、明治の初めにはすでにたくさんの炭鉱があったようです。1873年(明治6)には、佐々の市ノ瀬や中里、日字、佐世保の合計より多い年間42,000トンも産出しており、いかに石炭産業が盛んだったかを物語っています。

なかでも大瀬炭鉱は、海軍の燃料炭を採掘するための政府直営の炭鉱として繁栄しました。ここでは蒸気機関で坑内にたまった水を排水しており、文明開花の象徴として多くの人が見学に訪れたそうです。



炭鉱全盛期の白ノ浦港

小佐々郷土館所蔵

炭鉱が発展すると、海に面した小佐々には石炭積み出しのための港も各地にできました。特に、白ノ浦港までは鉄道も敷かれ、北松炭田で採掘された石炭の積み出し港として大変賑わいました。

しかし、第2次世界大戦後の1960年代になると、それまで石炭が中心だったエネルギー源が、石油に急激に変化するという「エネルギー革命」が起こります。さらに、外国から安い石炭が大量に輸入されるようになると、日本国内の炭鉱は経営が苦しくなり、次々に閉山していきました。



補泊に残る石炭ポケット(ホッパー)

そして、1971年(昭和46)の太平炭鉱の閉山によって、約150年にも及ぶ小佐々の炭鉱の歴史は幕を下ろしました。現在では、わずかに残る⁷ボタ山や、⁸石炭ポケット(ホッパー)にその名残を留めています。

7 石炭を掘るときに、一緒に掘り出される石や泥を積んだ山。
8 掘り出した石炭を貨車に積むための施設。

コラム～炭鉱と女性労働者～

江戸時代から明治時代にかけての炭鉱の中には、個人的な炭鉱も多くあった。それらは、山の斜面に石炭の露頭を見つけ、そこから横穴を掘って石炭を採掘した。このような炭鉱は、小さな坑口から真黒になってはいだす坑夫の姿が、巣穴から出てくる狸に似ているところから「狸掘り」と呼ばれていた。

人がやっと通れる狭い坑道に入り、先山（さきやま）がツルハシなどで掘り、後山（あとやま）が竹で編んだ籠などで運び出した。先山が男性、後山は女性であり、多くの場合夫婦であった。

大規模な炭鉱でも、近代化されるまでは、多くの女性が坑内作業に従事しており、世知原炭鉱資料館（旧松浦炭坑事務所：第15章世知原参照）に展示されている当時の写真にも、坑内で作業する女性の姿が写っている。炭鉱内は、出水や落盤、ガス爆発など常に事故の危険と隣合わせであり、炭鉱資料館の脇にある松浦炭鉱の慰霊碑にも坑内事故で亡くなった女性労働者の名が刻まれている。

神崎教会ができる

相浦の大崎半島から浅子（第6章浅子参照）、小佐々そして田平（平戸市田平町）の海岸地帯にはカトリックの人たちが多く住んでいます。そのほとんどは、明治時代になって黒島（第10章黒島参照）から移住した人たちと考えられています。

平地が多く、住みやすい場所は、すでに江戸時代から人が住んでいました。そのため、移住してきたカトリック信徒たちは海岸部に住み着くこととなり、その多くは漁業を生業としています。

そして、1930年（昭和5）には、信徒たちの献金と労働奉仕によって、神崎に鉄筋コンクリートの教会堂が建てられました。規模は小さかったのですが、正面にいくつもの尖塔をもち、玄関部分の尖頭アーチや、リブ・ヴォールト天井（コウモリ天井）、飛梁（フライング・バットレス）を備えた典型的なゴシック様式の美しい教会でしたが、残念ながら2005年（平成16）に老朽化のために建て替えられました。



解体前の神崎教会

※2003年（平成15）撮影

9 12～16世紀にヨーロッパで流行した美術様式で、教会建築に用いられることが多い。

郷土の人～日本人最初の神父・有安秀之進～

1855年(安政2)～1939年(昭和13)

小佐々の矢岳出身の有安秀之進は、明治元年にマラッカ半島のピナン神学校に派遣された少年の一人である。キリシタン禁制の時代でありながら、信仰に身を投じたことから、出身は潜伏キリシタンであろう。その後、東京や長崎で修業し、日本人最初の神父になった。派遣された明治元年前後の長崎では、3千人もの流刑者を出すキリシタン弾圧(浦上四番崩れ)が起こっている。秀之進の神学校派遣は、まさに命がけであった。



有安秀之進

※写真引用：小佐々町郷土誌

小佐々の戦争遺跡

第2次世界大戦末期の1945年(昭和20)3月、矢岳に体当たり攻撃を行う特攻隊「第31突撃隊」が設置されました。ここには10特攻艇などが配備される予定で、矢岳漁港の入り口にある前島には整備工場や防空壕の建設工事が進められました。しかし、敗戦までに基地は完成しなかったため、幸いなことにここから特攻隊が出撃することはありませんでした。



前島に残る防空壕

現在でも前島には特攻艇を引き上げるためのレールや、防空壕が残されています。

10 爆薬を積んだモーターボート「震洋」50隻と、魚雷2本を積んだ特殊潜航艇「蛟龍」4隻が配備予定だった。

地域の年表

時代	出来事
縄文時代	約8,000年前 大悲観岩陰で定住が始まり、付近で狩りをした。
弥生時代	約2,000年前 本立寺の場所に共同墓場が形成された。
古墳時代	約1,500年前 神崎の古田にムラがあり、墓が作られた。 下島に古墳群が形成された。
鎌倉時代	
1218年(建保6)	松浦莞の峯氏の領地として屋敷(矢岳)や楠泊の地名が現れる。
1244年(寛元2)	肥前国御家人小佐々重高と初めて小佐々を名乗る人物が登場する。
1295年(永仁3)	小佐々小四郎が永徳寺を創建したと伝わる。

時 代	出 来 事
むろまち 室町時代	
1384年(永徳4)	松浦党の国人一揆に、小佐々備前守が名を連ねる。
1392年(明德3)	松浦党の国人一揆に、小佐々備前守勤が名を連ねる。
1413年(応永20)	近江源氏を祖先とする佐々木氏が小佐々に下向して、小佐々氏になるという。
1424年(応永31)	永徳寺住職の墓碑が建立される。
1428年(正長元)	小佐々小四郎没。(伝)
1431年(永享3)	小佐々小次郎が永徳寺に鐘、山林、田、祠堂を寄進する。
せんごく 戦国時代	
1467年(応仁元)	小佐々弾正ほか一族は西彼杵の多比良に移住。(伝)
1563年(永禄6)	平戸の松浦隆信が宗家松浦氏の飯盛城を攻めたとき、小佐々氏が参戦。
1574年(天正2)	平戸の松浦鎮信が大村氏を攻めたとき、小佐々伊予が参戦。
えど 江戸時代	
1637年(寛永14)	小佐々左助、島原の乱に際し、平戸藩家老松浦藏人信正に従って長崎の警護につく。
1643年(寛永20)	松浦鎮信、永徳寺に寺領5石1斗を下付する。
1698年(元禄11)	大別当新田ができる。
1818年(文政元)	この頃、相浦の斉藤松五郎により大瀬炭鉱が開かれる。
1830-43(天保年間)	沖田新田ができる。
1854-59(安政年間)	常平倉新田ができる。
1858年(安政5)	竹ノ木場に炭鉱が開かれる。その後も炭鉱の開発は続いた。
1863年(文久3)	永徳寺の半鐘が大砲製造のため供出される。
1866年(慶応2)	この頃、西ノ浦新田ができる。
1874年(明治7)	小笹学校・楠栖学校創立。
1875年(明治8)	前川(小佐々)小学校創立。
1884年(明治17)	楠栖小学校創立。
1889年(明治22)	新制度の小佐々村設置。
1930年(昭和5)	神崎教会堂竣工。
1945年(昭和20)	第31突撃隊(矢岳突撃隊)発足。
げん 現代	
1947年(昭和22)	楠栖・小佐々中学校創立。
1950年(昭和25)	小佐々町町制施行。
1971年(昭和46)	大平炭鉱閉山、150年にわたる小佐々の炭鉱の歴史が終わる。
2006年(平成18)	佐世保市と合併、佐世保市小佐々町となる。